

マルメロ

藤原芳子

生家には、四季折々の果実がなった。

子供の頃、学校から帰ると木に登り、空腹を満たし、それが、おやつがわりだった。

秋も深まり、茶褐色がかかった木の葉の間から、くすんだ黄色の実が見え隠れしていた。近づくと、なんともいえない香りが、鼻をくすぐった。

実はリンゴほどの大きさで、いびつな形をし、表面は薄綿毛のようなもので、包み込まれていた。甘い香りに、つかぶりついたが、硬くてゴソゴソし、渋味もあって、とても食べられる実ではなかった。それがマルメロだった。

野外での冬仕事が片付いても、家の中では漬物、柿の皮むきなど、仕事は途切れることはなかった。それでも一段落した頃、プーンと甘い香りが炉端のほうからした。父が鍋から汁だけをコップに入れ、「ほれ、マルメロだ」と、手渡ししてくれた。かじかんだ手で口にした。くどくない甘さと、な

んとも言われぬ味が、スウーと入っていく喉ごしに、ついお代わりをした。

鍋底に実がごろごろ残っているのに、なぜくれないのだろうか、ふしぎにおもった。

誰もいなくなってから、その実を口にしたら、生で食べたあの時と同じで、ゴソゴソして飲み込めなかった。

今は散歩コースに、リンゴ畑が点在してあり、その中に一本だけ、マルメロの木を見つけた。

幼き頃、父が作ってくれた、甘く、まるやかなシロップを、味わいたいとおもった。

ある朝、あの実が一つ残らず消えていた。是非とも手に入れたかったので、リンゴ畑の持主の農家に急いだ。

「マルメロ分けてくださいませんか」。ちやうど奥さんが出てくれて「食べ方もよくわからないから、好きなだけ持って行って」と、買物袋を奥から持ってきてくれた。

はなれの作業場に通されると、一瞬、甘酸っぱいリンゴの香りがした。隅の方に無造作に、ダンボール箱に入れられていたマルメロを、袋いっぱい

いもらった。

早速シロップ作りにとりかかった。実は硬く、皮も包丁では容易にむけないので、そのまま六等分に切り、種を取り、鍋にマルメロ、水、砂糖を加えて火にかける。

沸騰してくると、甘い香りが室中に広がり、幸福にひたった。

二十分程で実は柔かくなり、味見をしたら、何か、ものたりない。父の作ってくれた味とは違っていた。

飲物類に、よくレモン汁を使っていたので、入れてみたら、味がひきしまつて、なんともいえぬおいしさになった。

レモンなど手に入らなかったころ、父は隠し味に何を加えて、あんなにおいしかったのか。

忘れられない味となったマルメロだった。

ヤマユリ

藤原芳子

垣根から道路側に顔を出した花を見て、

「ユリ、きれいに咲いているねえ」

早朝の散歩でもしてきたのだろうか。近所のおじいさんが声をかけてきた。

草むしりの手をとめ、「好き勝手に育っているのよ」と、立ち話を始めたら、庭を見せてと言う。断る理由もなかったが、返事に困っていると、つかつかと踏み込んできた。

「あまり広い敷地じゃないけど、中に入ったら意外と広いねえ」

貶しているのか、褒めているのか。ちょっとカチンときたが、花に目を止めてくれるだけでも、うれしかった。

それは七年程前に、我家の庭に突如として芽を出したユリだった。

草取りをしていたとき、手元に十センチ位に伸び

た茎を見つけた。細目の葉を三枚ほど付けていた。葉の形を見て、ユリの子供だとすぐわかった。

球根も植えていないのに、どうしてここに。鳥、それとも風に吹かれてきたのだろうか。

隣り近所の庭には、カサブランカ、テッポウユリ、カノコユリと、新品種ばかりだ。

我家に発芽したユリは、どんな色の花を咲かせてくれるだろうと、楽しみにしながら目印に棒を立てた。

二年位たった夏、茎は細筆程になり、丈も五十七センチほどに伸び、先端に一輪の花をつけた。白い花弁の中心部に、黄色の斑点があり、子房の先は赤褐色、まさしくヤマユリだった。顔を近づけると、どこか初々しい香りがした。

次の年は、茎も太く、丈も一メートル程に成長して、花もたくさんつけ、しなやかに垂れ下った。

早朝に窓を開けると、鼻をつまみたくなる程の強い香りを漂わせ、もう一人前ですよ、といわんばかりだった。

実家の林や庭にも、夏になると、あっちこっちにヤマユリが咲いていた。

手を加えられて咲く花よりも、静寂な林の中で、一輪か二輪付け、まばらに咲いていると、自分の力で精一杯生きているようで、私は好きだった。

炬燵が恋しくなるころ、ユリ根のあんかけを食べた記憶があるが、淡泊な味で、それほどおいしいとおもわなかった。

残暑もすぎ、白露のころ、ユリの根元から、土がモコモコ盛り上って、迷路のように連なっていた。もしかしてモグラ、ネズミの仕業かもしれないとおもって、イシヨクベラでひっしに掘り起こしてみたが、それらしき生物はいなかった。

植物はよくできたもので、秋には房にぎっしりと種を付け、それが自然とはじけて子孫を残してくれらる。七年前には一株だったのが、今は二十五株程に増えている。

あまり手を加えなくとも、野生のごとく自由に、我家の庭に居座っている。

また、来年も清楚な姿で楽しませてほしい。